

# 現代能歌劇「杜若」口語訳台本 原作：金春禅竹(推測) 台本：小菅泰雄

舞台＝舞台背面は「鏡板」に替わる杜若が咲き乱れた垂れ幕がある。垂れ幕の前には「後座」または「出囃子」になって、雛壇に9名の演奏者が椅子にかけて列ぶ。

管弦楽＝Fl. Ob. Cl. Fg.各1。弦5部(Vn.1 Vn.2 Vla. Vc.各1)。Piano 1。Harp 1。

時 と 所＝平安時代、三河の国八橋、杜若の咲き乱れる五月。

登場人物

杜若の精(仕手・シテ)=コロラチャーラ・ソプラノ

僧(脇役・ワキ)=バス・バリトン

第1場「八橋にて」

前奏曲

名乗りの段

フルートソロの中を静かに旅の僧侶登場し、正面に立つ。

僧 おお、これは何と美しい眺めだ。杜若が今を盛りと咲いている。諸国行脚の旅の疲れを心の底から癒してくれる。

杜若は、「美しい女人」別名ではなかったか。五月に必ず咲いて、心を和ませてくれる。

**問答**

精 (下手カゲから)もし、御坊さま。「杜若の精」がゆっくりと登場)

そこで何をなさっておいでですか。

僧 杜若が美しいですね。綺麗に咲いているので、眺めているのです。ここは何と言う所ですか。

精 三河の国の八つ橋という所です。杜若の花の名所ですよ。濃い紫色が、ことのほか美しいのです。

僧 そうですか。ここが三河八橋ですか。なるほど杜若が美しい。

精 沢が八方に流れて、八つの橋が架かるので、八つ橋と呼びます。在原業平様が、杜若の五文字を頭におく和歌は、「唐衣からころも 著きつつ馴つまれにし妻つましあれば、はるばる来ぬる旅をしぞ思う」。

**掛合**

僧 八つ橋のいわれと、杜若の五文字を詠み込んだ、在原業平の和歌ですか。素晴らしいですね。

二重唱

はるばる下る東あずまの旅路、行く末かけて妻を思い、八つ橋渡り、旅の思いの歌残す。

主は昔に業平なれど、形見の花は今ここに。

**上げ歌** 精のアリア

在原業平の歌は遠い昔のことだと、今咲いている杜若と、分け隔てないでください。

杜若の咲く水辺の如くに、浅からず契った人を、八つ橋の沢の流れように、八方に思い出されます。

**問答**

精 御坊さんと話すうちに、おなじみになれました。日も暮れてきました。むさ苦しいところですが、私の庵で一夜をお明かし下さいませ。

僧 ああ、ありがたい。それではお供いたしましょう。

間奏曲が流れる中を杜若の精が先になってステージをかるく一周する。

————— 暗 転 —————

第2場「杜若の精の庵」

精 どうぞ中へお入りください。(僧がステージ中央に立つ)

しばらくお待ちくださいませ。(杜若の精が下手に退場)

**物着** ほどなく杜若の精が唐衣をまとい、下手よりゆっくりと登場する。(間奏曲が終わる)

## 問答

僧 おお、美しい。このような庵で、美しい唐衣からころもをまとった女人に会うとは。

精 この衣は高子様の形見です。高子様は、清和天皇の妃になられた方ですが、業平は妻とよんで、杜若の五文字を和歌に詠み込んだ、忘れ得ぬ恋人。高子様の形見の唐衣からころもを、私は肌身離さず持っているのです。

僧 高子様の形見ですか。それにしても、一体あなたはどなたですか。

精 私は杜若の精です。業平の菩提を、ずっと吊って参りました。業平は「歌舞の菩薩」の現世の仮の姿です。私たち一木一草いちぼくいつそうの命にも、業平の和歌の縁で悟りが得られますよう、菩提を吊っているのです。

## 掛合

僧 杜若の精と悟りの話ができるとは、現世の奇跡です。

### 二重唱

一木一草の命にも悟りを与える歌舞の菩薩、現世の仮の姿。  
忘れ得ぬ恋人の高子様と別れて、妻と呼ぶ高子様と別れて、  
生きとし生けるものを救うため、東に下る旅をした、在原の業平。

## 次第

精 高子様の形見をまとい 業平を讃えましょう。

サシ

僧のARIA

元服は、春霞たなびく三月の、奈良の宮中。仁 明天皇の命で、透額ういかんの初冠をゆるされた。

## クセ

栄枯盛衰の身のさだめ、東に下り行く雲の、伊勢や尾張の波を眺めて詠む和歌は、  
いとどしく過ぎにし方の恋しきに、うらやましくも帰る波かな。  
傷ついて苦しい思いのたけを詠んだ和歌は、  
信濃路の 浅間の山に立つ煙 そちこちの人 見ては咎とがめる。

\*

精のARIA

三河の国八橋の沢辺に匂う杜若の花紫は、高子様の色  
妻と呼ぶ恋人の高子様は、どうしているかと恋しく思い出される。  
三河や八橋の沢辺の水のように限りなく、契った女人の数々に、名前を変え身分を変えて、  
「人待つ女」「もの病みの女」「玉簾の女」。「もの病みの女」の死を悼み謡んだ歌は、  
「ゆく蛍 雲の上まで行けるなら 秋風吹くと 雁に告げこせ」。  
その雲の上から現われて、生きとし生けるものを救うため、  
歌舞菩薩の仮の姿は業平と、誰が知り得たか。  
本覚真如の身をわけて、陰陽の神と言われたは、ただ在原業平。  
暗い世界に行かぬよう、あまねく照らす有明の  
「月でなく 春も昔の春でなく、わが身ひとつは もとの身にして」

## 次第

さあ、高子様の形見をまとめて 業平を讃えましょう。

二重唱

謡 胡蝶が、満開の桜に粉雪のように舞っています。

柳の枝に鶯が飛び交い、ひらひらと金色に輝いています。

ワカ「植え置きし 昔の宿の杜若 色ばかりこそ 昔なりけれ」

序 業平の名を残すゆかり縁はなたちばなとなった花 橘も、

ノリ五月に咲く菖蒲の花も いずれも美しい杜若。

僧のARIA

序 梢に鳴く 蟬の抜け殻に似た高子様の唐衣。

ノリ悟りを得た「杜若の精」。袖の白妙 卯の花の雪の如くに

\*

東の空は浅き紫 杜若の花も紫。杜若の精の悟りは 明るく開けて、  
さあ、今こそは草木も同じ尊い命、さあ、今こそは草木も同じ尊い命と  
悟りを得て現し世の 杜若の精は消えゆく。

————— 幕 —————